

## 論 説

アウシュヴィッツに消えたウィーンのユダヤ人政治家  
——ダンネベルク——

伊 藤 富 雄

## 目 次

はじめに
子供時代から青年時代
「青少年インターナショナル」時代
オーストリア第一共和国時代
終焉に向かって
おわりに

## は じ め に

2008年の8月から在外研究員としてウィーンに半年間滞在したが、ウィーンⅢ区に借りていた住居のすぐ近くに第二次大戦時の高射砲台が残っており、その一帯は公園になっていた。ぶ厚いコンクリートで固められた巨大で堅固な高射砲台は撤去が困難だったのか、戦後もそのまま残され、一部は倉庫代わりに使用されており、時折トラックが出入りしているのを目にしたこともあった。ある時、その公園を散歩していて、公園の西隣りが「ダンネベルク広場」と命名され、ダンネベルクの簡単な年譜を記した黒御影石の記念碑が置かれているのに気づいた。ダンネベルクはハプスブルク帝国末期からオーストリア第一共和国時代の社会民主党の偉大な指導者であるバウアーやレンナーたちと共に祖国オーストリアと党のために闘った人物の一人である。しかしダンネベルクはいわゆる「1934年2月蜂起」の際に逮捕され、一旦は釈放されたが、ドイツ軍がオーストリア国境へ迫ってきた1938年3月に再逮捕されてしまった。またダンネベルクはユダヤ人だったために逮捕後、強制収容所へ送られ、最終的にはアウシュヴィッツ絶滅収容所で亡くなった。

オーストリア現代史でダンネベルクが取り上げられることは少ない。またウィーン市民、オーストリア国民の間での人気や知名度という点でも、第二次大戦後まで生き延び、臨時政府首相を務めたレンナーや外相を務めたバウアーといったダンネベルクより年上の人物たちの方が勝っていると言える。しかしながら第一次大戦前後からオーストリア第一共和国にかけての社会民主党への貢献、とりわけ当時の若い徒弟たちの処遇改善へ向けての闘いや彼らの組織化、さらには「赤いウィーン」の建設という点ではバウアーやレンナーに決して引けをとらないと言えるのではなかろうか。以下、主として「オーストリア抵抗運動資料館」での資料を中心に、ダンネベルクの生涯を追いながら、オーストリア現代史に於ける彼の功績を見て行くことにする。

## 子供時代から青年時代

ダンネベルクは 1885 年 7 月 23 日にウィーンに生まれている。ちなみにダンネベルクと同時代にオーストリアの社会民主党で活躍したバウアーは 1881 年、ドイッチュは 1884 年生まれである。ダンネベルクの父親は移民としてブダペストからウィーンへ来ている。当時はハプスブルク帝国の各地から多くのユダヤ人たちがウィーンに集まってきていたらしい。父親はウィーンで大きな広告代理店を設立し、また漫画雑誌の出版も行ない、裕福ではあったが、多少胡散臭いところのある人物だったようである。そうした父親とダンネベルクの個人的な関係に関しては何も知られていない。彼は党の友人たちの誰にもその点では話をしなかった、という。ヒンデルスはダンネベルクやバウアーたちのように親の財力で大学でも学ぶことができた者たちを「感情社会主義者」と呼んだ。<sup>1)</sup>それは徒弟や労働者たちの厳しい現実が彼らの正義感に訴え、社会主義者になったからである。ダンネベルクはすでにギムナジウムの時に兄から、徒弟たちのために新聞を作ろうと募金活動をしている生徒がいることを聞かされ、自分の小遣いをそのために寄付している。それが後に関わることになった『青少年労働者』との最初の出会いであった。<sup>2)</sup>他の多くの若い社会主義者たちはブルジョアの父親とは縁を切り、父親の元を離れて行ったが、ダンネベルクは学生時代も父親の元に留まり、経済的な支援を受け続けた。そうすることで社会主義を学ぶために必要な時間を、青少年組織、後には社会民主党で活動するための時間を確保しようとしたのだった。こうした点が、しばしば後に非難される彼の「妥協的性格」と言えるのかもしれない。しかし彼にとって「妥協」は安易で気楽なものではなく、しばしば非常に複雑かつ心理的に極めて深刻な選択肢だった。ある状況下では「妥協」が主導権を握るための唯一の手段だったこともあった。かくしてダンネベルクは、敵対するキリスト教社会党員たちが卑俗な反ユダヤ主義的方法で彼と論争した場合も、それに耐えることができたのであり、彼が青少年インターナショナルの書記、およびウィーンの前社会民主党書記を務めていた時も、そうした攻撃を平然と受け流すことができたのだった。

1903 年、ダンネベルクは作曲家シューベルトも学んだ市内中心部にある有名なギムナジウムを卒業後、ウィーン大学で法律を学び始める。またこの年、彼は設立されたばかりの「青少年労働者連盟」に加盟する。そしてこの年の夏、両親と過ごした保養地パート・イッシュルでダンネベルクは、「青少年労働者連盟」の活動として、その地の勤労青少年に教養の重要性を訴える講演を行なった。彼らはダンネベルクの講演に感激し、彼に感謝の手紙を寄こしている。<sup>3)</sup>

1) Hindels, Josef: Robert Danneberg. Gelebt für den Sozialismus – Ermordet in Auschwitz, Wien 1985, S.6.

2) Kane, Leon: Robert Danneberg. Ein pragmatischer Idealist. Wien 1980, S.18. この本は当時の膨大な資料に基づいて書かれており、筆者が目にした研究書の中では最も信頼のおける研究書で、ダンネベルクの実像に迫っている。拙論ではこの本に負うところが多かったことを付記しておく。

3) ebd., S.19.

ダンネベルクは彼らとの交友を通じ、さらにウィーンに戻ってから、徒弟や勤労青少年の置かれている厳しい現状を徹底的に学んだが、その現状は悲惨極まるものだった。当時は労働者のほぼ半数近くが零細企業で働いており、労働者の労働条件は劣悪であり、彼らへの搾取は限りがなく、ことに若い徒弟たちは人間としての品位も親方たちによって踏みにじられた。彼らはまるで奴隷のように扱われ、虐待を受け、裁判沙汰までなった事件も生じた。徒弟たちの仕事はおよそ職業訓練とは呼べないものであり、彼らは権利もなく、社会の保護もなく、事あるごとに殴られることが日課だった。

ダンネベルクはこうした勤労青少年の悲惨な状況と闘う中で筋金入りの社会主義者となっていく。彼の心は搾取された者たちのために向けられ、彼の鋭い知性は搾取の経済的原因、資本主義の生産関係のメカニズムを分析した。彼は「青少年労働者連盟」の主要課題は徒弟の処遇の改善にあると看做した。さらに彼は職業訓練に役立つ国家による見習い実習工場の創設を求めた。このテーマに関して彼が書いたパンフレットは大きな反響を呼び、青少年労働者たちから熱狂的な賛同を得た。

ダンネベルクの師であり、手本となった人物は12歳年上のヴィナルスキーだった。<sup>4)</sup> 彼は壁紙張り親方の息子で、彼自身も壁紙張り技術を習得し、労働者教育連盟での教育を受け、かつ独学で学んでいた。ダンネベルクが彼と知り合ったとき、彼はすでに党書記局で働いていた。彼は徒弟たちに人気のある演説者だった。彼はウィーン市参事会で、また帝国参議院(1907年以降)で徒弟たちの利益を守るために働いた。ダンネベルクはやがてヴィナルスキーと並ぶ演説者、またヴィナルスキーの後継者となっていく。

1904年2月から3月にかけてダンネベルクはウィーンの各地で連続講演会を開始した。こうした一連の講演のタイトルは「資本主義の本質」、「我々の歴史認識」、「資本主義の発展」、「未来国家」などで、それを基に6年後に一冊のパンフレットも出版した。

ダンネベルクの講演会に参加した、ある人物は講演の様子をこう記している。

「ダンネベルクは平然と、動揺することなく、ほぼモノトーンな調子で話をした(。。)彼は人間としての品位や団結心を大切にしよう、我々の感情に訴えた。しかしながら決しておおげさな言葉を使用せず、彼の声の情熱のない調子を変えることはなかった。私には、彼はまさに数学的正確さで脳が働いている理性的人間の見本のように思われた。」<sup>5)</sup>

1906年4月の第二回青少年労働者連盟の大会でダンネベルクは国立の見習実習工場設立に

4) Neugebauer, Wolfgang: Bauvolk der kommenden Welt. Geschichte der sozialistischen Jugendbewegung in Österreich. Wien 1975, S.46.

5) Braunthal, Julius: Auf der Suche nach dem Millennium. Wien 1964, S.48.

向けた演説を行なった。しかしそれに対して幾つかの組合、とりわけ書籍印刷工組合は機関紙『前進』でダンネベルクの意見に否定的な考えを示し、「ブルジョアのインテリ」だとレッテルを張り、さらに「ブルジョアのユダヤ」、「ユダ野郎」、「タルムートの面倒な奴」など、ダンネベルクがユダヤ人であることを攻撃した。<sup>6)</sup> ダンネベルクは、自分たちの仲間の中にも反ユダヤ主義の偏見が存在することを痛感せざるをえなかった。この苦い経験を彼は党幹部の戦争政策に反対した際にも味わうことになる。しかしダンネベルクは挫折しなかった。彼は、自分たちの組織の中でも意識形成を巡る闘いが不可避であることを理解したのだった。この国立の見習実習工場設立に関しては 1907 年 1 月の青少年連盟指導者会議でダンネベルクを支持する結論が満場一致で受け入れられている。

「青少年労働者連盟の指導部はここに明白に宣言する。すなわち、指導部の委託を受けて記された国立見習実習工場のパンフレットの内容に、連盟指導部は完全に同意している、ということである(。。)『前進』が同志ダンネベルクに敵対して行なっている憎むべき個人敵攻撃に対し断固として抗議する。」<sup>7)</sup>

さらに連盟指導部はダンネベルクを『青少年労働者』の編集者に任じ、1907 年 11 月号からは彼が責任編集者となった。<sup>8)</sup> さらに一年後に彼は党の書記となり、ウィーン教育委員会は彼を書記に選んだ。因みに委員長はヴィナルスキーだった。

ダンネベルクは自立した青少年組織の重要性を若くして認識した一人だった。大人による青少年育成のイデオロギーを彼は拒否した。青少年は自らの組織に対する権利を有していなければならず、しかもその組織は青少年自らが選出した幹部によって指導されねばならない、と彼は確信していた。党は青少年組織を支え、助言する使命を有するだけであり、あくまでも彼らの自己決定を尊重すべきなのである。

しかしながらダンネベルクは同時に、例え党が多くの問題で青少年とは別の意見であっても、青少年は党と密接に結びついていなければならないし、階級の敵との闘争に於いて党を無条件に支持しなければならない、とも主張した。こうした、言わば党への批判と党への忠誠の両立はダンネベルクの考えでは決して矛盾するものではなかった。党に損害を与えかねないような対立を避けるために彼の「妥協的性格」が働いたのである。しかしそうした「妥協的性格」は必ずしも全ての青少年から支持された訳ではなかった。

後にダンネベルクが国会議員兼党書記としてトップの一人になったとき、青少年組織の彼の

---

6) Neugebauer, a.a.O., S.47.

7) Der jugendliche Arbeiter, 6.Jg., März 1907, S.11.

8) Kane, a.a.O., S.38.

後継者たちとの間に緊張関係や葛藤も存在した。しかしダンネベルクは、話合いの中では党の立場を代表しても、青少年たちが幾つかの点で違った見方をしていることに、完全な理解を示した。

当時のダンネベルクのことを、周囲の人物たちがどのように見ていたかをバウアーがカウツキーに宛てた手紙から知ることができる。

「ダンネベルクは(。。。)アジテーターとして、また弁士として非常に有能である。また組織の些細な仕事に於いても非常に熱心である。党は彼に希望を託しても構わないだろう。」<sup>9)</sup>

しかし一方でバウアーは、党内右派を刺激するとの理由からダンネベルクの論文の掲載を拒否したり、あるいは幾つかの箇所を削除するよう要請したこともあった。

### 「青少年インターナショナル」時代

ダンネベルクが『青少年労働者』の編集者の時に発行部数は増加し、さらに連盟加盟の青年労働者の数も増加した。1909年には、メンバーは6,500名、1911年末には11,420名となった。

1907年、「青少年インターナショナル」が設立された。各国で暫定的なインターナショナル事務局が作られていたが、新たなインターナショナルの所在地としてウィーンが選ばれ、1908年にダンネベルクは「青少年インターナショナル」の書記を引き受けることになった。<sup>10)</sup>

ダンネベルクが「青少年インターナショナル」の書記として活動を開始した1908年、彼は同時にウィーンの労働者組織の授業委員会の書記にも招聘された。書記として招聘したのは他ならぬヴィナルスキーだった。ダンネベルク以上に優れて青少年労働者連盟の教育活動を行なったものはいなかったからだった。ダンネベルクはとりわけ青少年組織の教育活動を強調した。彼は「青少年組織10周年」の記念号で『教養が自由にしてくれる』というタイトルの論文を書いている。

「我々が教養を積み積むほど、それだけ一層多くの自由を我々は手にし、それだけ一層我々のさらなる目標に対する憧れの念、我々の理想の実現に対する憧れの念は強くなる。」<sup>11)</sup>

授業委員会の任務は徒弟たちに、家庭や学校、職場では与えられなかった「教養」を身に付けさせるものだった。この授業委員会の最も重要な活動は講演会活動で、八ヶ月の間に1,216

9) ebd., S.28.

10) Neugebauer, a.a.O., S.85.

11) Der jugendliche Arbeiter, 3.Jg., November 1904, S.12ff.

回もの講演が行なわれている。<sup>12)</sup> こうした授業委員会の活動と連動した新しい雑誌『教養活動』も出版され、ダンネベルクはこの雑誌を通じても青少年労働者の教育活動を行なっていくことになった。この雑誌にはダンネベルクが行なった様々な講演会も紹介している。1911年、1912年の党大会で彼は、まだ多くの同志がこうした教養活動を「不可避の活動」とは認めていないことを指摘した。教養活動を通じて党員たちが何故闘うのか、何のために闘うのかを正確に認識してのみ、断固とした闘いが可能なのであり、そうした党員を育てていくことが党の最も重要な課題の一つである、と指摘した。そして、党のどの支部にも雑誌『教養活動』を一部は置いておかねばならない、と主張し、最後に彼は教養活動の意義をこう強調した。

「我々は教養活動を行なわねばならない。それは対立を調停するためではなく、労働者を資本主義の社会秩序に対する不倶戴天の敵に教育するためであり、労働者にそうした社会秩序を撲滅すべく、戦わねばならないことを教えるためである。階級を意識した労働者だけが資本主義の真の敵であり、彼らのみがプロレタリアートの勝利に終わる闘いを実行できるのである。」<sup>13)</sup>

1911年、ダンネベルクは新たに設立された賃借人組織に加盟した。メンバーにはヴィナルスキーやドイッチュもいた。<sup>14)</sup> 当時、賃借人は家主の思うがままだった。家主の気にいらなことがあれば、即刻追い出された。また子供の多い家庭は賃借を拒否されたり、些細な理由で追い出された。こうしたウィーンの賃借人の悲惨な状況に対し、ダンネベルクは賃借人の立場に立ち、誠意を持って対処した。こうした彼の姿勢は後の「赤いウィーン」での勤労者用の住宅建設に繋がっていく。

1914年1月、ダンネベルクは党の出版検閲委員会のメンバーに選出された。この委員会は『労働者新聞』や『フォルクストリビューネ』、その他の党機関紙のコントロールを行なう重要な委員だった。<sup>15)</sup>

1914年8月、第一次大戦が勃発する。この戦争にヴィナルスキー、ダンネベルク、ドイッチュたちは反対を唱えた。出版検閲委員会のメンバーであるダンネベルクは戦争肯定の論説を掲載し続ける『労働者新聞』に対し、党や組合に非常な害を与えることになりかねない、との書簡を送った。<sup>16)</sup> ウィーンの党指導者はダンネベルクを支持し、このことによってダンネベルクは党内での影響力を強めることになった。

---

12) Kane, a.a.O., S.48.

13) ebd., S.57.

14) Arbeiterzeitung, 25.Februar 1911.

15) Arbeiterzeitung, 22.Februar 1914.

16) Kane, a.a.O., S.66.

1914年9月27日、ダンネベルクは自ら『労働者新聞』に論説を発表し、慎重な言い回しで戦争と愛国主義に対する批判を行なった。彼は戦争に関してイギリスの社会主義者が述べた言葉を掲載することに固執した。

「暗い深淵から我々はあらゆる国の同志たちに心からの挨拶を呼びかける。大砲の轟きを通して我々はドイツの社会主義者たちに我々の共感を送るものである。」<sup>17)</sup>

それはインターナショナルの崩壊を嘆いていた人々にとって勇気を引き起こすメッセージだった。しかし同時にダンネベルクと党のドイツナショナルな指導者たちとの間の対立を物語ってもいた。

1915年9月、戦争勃発後の初の党大会でダンネベルクら、戦争反対派は独自の決議案を提出できなかった。ウィーンでは彼らは孤立していた。同年、ダンネベルクは論説『マニフェスト』で、戦争を呼び起こした民族主義的潮流に敵対し、戦争反対の考えを訴えた。<sup>18)</sup> この年の11月、ダンネベルクの師であったヴィナルスキーが亡くなっている。

1916年、「カール・マルクス団」を結成して党指導部の戦争肯定政策に反対していたアードラーが逮捕され、ダンネベルクがその後を継ぐことになった。こうしてダンネベルクは党内の左派過激派や右派との闘いの矢面に立たされた。右派は党がダンネベルクの影響を受けて平和主義に向かうことに警戒心を抱き、青少年の過激化の責任は彼にあると批判した。また左派過激派は1917年の党大会で党から分裂すると公言した。

ダンネベルクは1917年5月に1年間の志願兵として召集されていたが、党は1917年8月20日に国防省へ嘆願書を出し、ダンネベルクが結核を患っていることを指摘して除隊を願い出た。嘆願は1917年8月21日に受理され、1917年11月15日まで一時的にダンネベルクは除隊することになった。<sup>19)</sup>

1918年10月15日、ダンネベルクは集会で知り合ったドイツ生まれのゲルトルートと結婚、彼女との間に二人の子供をもうけることになる。<sup>20)</sup>

## オーストリア第一共和国時代

第一次大戦後に生じたオーストリア第一共和国でのダンネベルクの政治的キャリアは臨時ウィーン市議会の議員に任命されたことで始まった。1918年11月、彼は社会民主党市会議

17) ebd., S.70.

18) Danneberg, Robert: Die Zukunft der Arbeiterbewegung, in : Manifestschrift 1915, Wien 1915.

19) Kane, a.a.O., S.105.

20) ebd., S.108.

員クラブの書記長として執行部に選出された。1919年2月に行なわれた戦後初の選挙では、社会民主党が72議席を得て第一党になり、第二党のキリスト教社会党との連立政権が誕生し、レンナーが連邦首相、パウアーが外相となった。しかしながらダンネベルクには重要なポストは与えられなかった。この連立政権は翌年の1920年6月には議会でのささいないざこざで崩壊し、苦肉の策として各党からなる「比例配分内閣」が誕生した。

この内閣の下で新しい憲法法案が議論され、1920年10月1日にオーストリア共和国憲法として承認された。この憲法では議会は国民議会(下院)と連邦参議院(上院)の二院制とされ、前者は比例代表制による普通選挙で選ばれ、大きな権限が与えられた。また連邦首相もこの下院で選ばれた。10月17日にはこの新憲法下で選挙が行なわれたが、キリスト教社会党が85議席を獲得して第一党となり、社会民主党は69議席に留まった。その結果、社会民主党は最終的に政府から去ることになった。

新しい憲法に従って、オーストリア共和国の首都であるウィーンはそれまで所属していたニーダーラント州から独立し、他の連邦州と同等の権利を有する特別な市となることが決定された。そのために新たに「ウィーン市憲章」が制定されることになり、ダンネベルクを含む15名からなる委員会が結成され、1920年10月に協議が開始された。新しい憲章は1920年11月10日に採択された。このウィーン市憲章制定作業を通じて、ダンネベルクの有能さが改めて認められた。ウィーン市の憲章により、ウィーン市は州と同等の権利を有し、独自の財政政策、独自の税制も可能となった。ウィーン市長は連邦州知事と同格であり、理論的には警察権も市長に帰することになったのである。新しいウィーン市議会は1920年11月26日に開催され、ダンネベルクが市議会の初代の議長に選出された。<sup>21)</sup>

ダンネベルクは書いている。

「この数年間にウィーンほど多くの陰口を叩かれた都市は恐らく存在しまい。(。。。)にも拘わらず真実は勝利したのだ。今日、ウィーン市の市庁舎には全世界から都市の代表者たちが姿を見せている。社会民主主義の市当局の活動を学ぶためにである。(。。。)擁護施設の見学だけでも30カ国から32,348名が参加した。ウィーンの学校改革では世界中の専門家たちの注目を集めた。」<sup>22)</sup>

ヘルマーはダンネベルク没後10周年の記念演説で以下のように述べている。

「彼はウィーン市憲章の創案者であり、ウィーン市議会の再建を実行し、ウィーン市議会の制

21) Arbeiter-Zeitung, 27.November 1920.

22) Kane, a.a.O., S.126.



度を創設し、最後には（。。。）社会的住宅建設税を導入した。」<sup>23)</sup>

いわゆる「赤いウィーン」の根幹をなしているものの一つが、この「社会的住宅建設税」である。「赤いウィーン」では富裕層に厳しく課税し、その税収入を基に市民に近代的で衛生的な住居を手ごろな家賃で提供し、幼稚園や保育施設を含む様々な福祉保護施設を建設し、労働者学校という新しいタイプの学校設立を含む学校教育改革などを行なった。最初の賃借人保護法は1922年12月7日に採択された。しかしながら5年間で2万5千戸の住宅を建設するという市議会の決議に、キリスト教社会党の連邦首相ザイペルは、住宅建設を餌にして国民を支配しようとしている、と批判した。

「住宅を慈悲によって分配するために、個人の住宅建設を不可能にし、唯一ウィーン市だけが建設できるという社会民主主義者の計画は彼らの意図を我々に明白に暴露している。すなわち、住宅の国営化とそれによって家族や個人を支配することである。」<sup>24)</sup>

「オーストリアはあらゆる国々の中で最も過激な賃借人保護法を有している」ことを認めたダンネベルクにとって、賃借人保護や公営住宅建設は社会主義的ウィーンの、すなわち「赤いウィーン」の基本だったのである。

こうしたダンネベルクの活躍に対し、キリスト教社会党からは反ユダヤ主義的攻撃がかけられ、さらには『農民新聞』でもダンネベルクは農民に対する憎悪に満ちた演説を行なったと非難された。<sup>25)</sup>

ダンネベルクが1919年に党書記に任命されたとき、党員は約33万だった。その数は1929年には71万名に増加したが、1933年には64万名に再び減少した。

1923年にダンネベルクのパンフレット『腹心の友』が出版されたが、それは『党プログラム』同様に多くの版を重ね、活動的な党員の教育のために極めて重要な教材となった。<sup>26)</sup> 彼はまた選挙結果の分析も行ない、党は女性票および組合員でも党に投票しない層の、両方の獲得に努めねばならないと確信した。<sup>27)</sup>

1924年、ダンネベルクは党の機関紙に「目標を自覚した政策、賢明な宣伝活動および熱心な教養活動」によって労働者階級全体を社会民主主義の陣営へ呼び寄せることが可能であり、

23) Arbeiter-Zeitung, 7.Dezember 1952, zitiert nach Alfred Magaziner: Die Wegbereiter, Wien 1977, S.142.

24) Kane, a.a.O., S.129.

25) ebd., S.136.

26) Danneberg, R.: Der Vertrauensmann. Winke für alle, die in der Arbeiterbewegung wirken. Wien 1921, S.48.

27) Kane, a.a.O., S.139.

近い将来にそうなるだろう、と確信している旨を書いている。<sup>28)</sup> また 1927 年の選挙後には、人々の支持を得るために党の活動は粘り強く、中断することなく継続させねばならないことを強調している。

「人間の魂を獲得する闘いは中断することなく継続される場合にのみ成功する。社会主義や党のために宣伝活動はそれ故一瞬たりとも中断することは許されない。我々に対立する抵抗が激しければ、それだけ一層我々の活動は情熱を込め、粘り強くなされなければならない。」<sup>29)</sup>

1926 年、ドイツ貯蓄銀行の銀行家とブルジョア政治家との癒着が明らかになった。社会民主党議員たちは議会でこの件を追及することにし、議会に調査委員会が作られ、ダンネベルクもそのメンバーとなった。この事件ではダンネベルクはいわゆる反ユダヤ主義的攻撃を逆手に取って攻勢に転じ、反ユダヤ主義者たち自身がユダヤの資本と結びついており、彼らの反ユダヤ主義は扇動に過ぎない、と明らかにしたのだった。結局、当時の連邦首相ラメークは退陣し、1926 年 10 月 16 日、ザイペルが新たな連邦首相に就いた。

1927 年 7 月 15 日、いわゆる「1927 年 7 月騒乱事件」が勃発する。この年の一月にブルゲンラント州で傷痍軍人と少年がナチス系の兵士に射殺され、その裁判で無罪判決が言い渡されたため、労働者がそれに抗議して蜂起したものである。しかし社会民主党はそれに対して取るべき行動に関して何ら指示も出さず、結果として 89 名の死者と多数の負傷者を出しただけで終わってしまった。バウアー、レンナーの党指導者たちはお互いにこの事件の責任をなすりつける醜態を演じ、バウアーはさらに過激な路線を、レンナーは他の政党との和協的な連合政策をとり続けることになった。この事件の直接の責任者であるウィーン市の警察長官ショーバーに対する責任追及が日増しに高まるのを受け、ダンネベルクはウィーン市議会内に調査委員会を立ち上げ、事件解明にあたった。そして調査委員会の報告を公表したが、新たな告発もなく、最終的な解決には至らなかった。報告は『労働者新聞』では「弾劾」と呼ばれたが、その内容は極めて穏健なものであり、キリスト教社会党のある議員は報告を評価しつつも、「弾劾」ではない、と不満を述べている。<sup>30)</sup> 2 年後の 1929 年、ダンネベルクは新たに連邦首相となったショーバーと新憲法草案を巡って交渉のテーブルに就くことになるが、憲法に則ったウィーン市の地位が侵害されなかった結果を考えれば、この「1927 年 7 月騒乱事件」に対するダンネベルクの態度をショーバーは好意的に受け取っていたのかも知れない。

1928 年秋、次第に勢力を強めていた右翼の護国団はウィーンでも最も「赤い」地域と言わ

28) Der Kampf, Jg.17, Juli 1924, S.293.

29) Der Kampf, Jg.20, Oktober 1927, S.467.

30) Kane, a.a.O., S.149.

れたウィーナー＝ノイシュタットで初めて組織的なデモを行ない、その力を誇示した。この頃から護国団はイタリアのムッソリーニとの繋がりを強め、資金援助も受け、権力奪取に向けて進んでいった。連邦首相ザイペルは左右両勢力の対立のため苦しい立場に追い込まれていった。そうした中で憲法改正要求が強まり、具体化されていった。主たる内容は連邦大統領の地位や権限の強化、連邦参議院を身分制代表機関にすること、大統領の国民による直接選挙などである。しかし4月にザイペルは退陣、シュトリールヴィッツが新しい連邦首相に任命された。しかしながら彼も護国団の国会に対する攻撃を機に退陣した。元警察長官ショーバーが新たな首相となり、憲法改正草案を1929年10月18日に国会に提出した。彼は明白な議会廃止を求める護国団の要請の意味ではファシストではなかったが「緊急命令権と非常事態宣言」で統治することのできる連邦大統領への並はずれた権力集中、大統領選挙に関わる規定変更（絶対多数獲得者不在の場合、選挙権年齢の引き上げなど）、連邦議会を州議会および上院がとって代わる、警察権力の強化、陪審裁判所の廃止などを求めた。最も重要な変更はウィーン市に関してだった。ウィーン市は州としての地位を失い、連邦直属の都市となり、劇場、映画館、病院、学校も連邦直属となり、ウィーン市は州収益割り当て金を失うことになる、というものだった。社会民主党はダンネベルクを交渉人として送りこんだ。彼は限りなく困難な交渉を行なった。1929年11月24日の社会民主党全国大会でダンネベルクは交渉の状況の報告を行ない、党がどこまで譲歩可能かを説明した。最終的に新憲法は社会民主党の妥協により、1929年12月7日に国民議会により議決された。議会の前にダンネベルクから最終報告を受けた議員連盟はそれを了承し、ウィーン市長ザイツは「ダンネベルクの並はずれた業績に対し党と連盟の感謝の念を申し述べたい。彼は数週間前から昼夜にわたって行なわれた交渉で、党の見解を並はずれた努力、手腕、そして成功でもって代表してきたのだった」と述べた。<sup>31)</sup> 憲法は幾つかの修正はあったものの、憲法に則ったウィーン市の地位が侵害されなかった点など、その本質からすれば民主主義的内容に留まった。

ライヒターはその著『第一共和国の栄光と悲惨』の中で個人的な体験から憲法改正をめぐる努力を語っている。彼はダンネベルクの寄与をこう記している。

「憲法交渉を成功裏に導いたことが、間違いなくダンネベルクのなした最大の政治的成果である。極めて扱いにくい素材を徹底的に加工する、途方もない熱心さと無限の能力を有したこの人物、うんざりするほど即物的にもなりえた、この神経の図太い人物、大政党を制御し、導くための様々な術を心得ていた、生まれつきの党書記、彼は人を扱い、人と交渉する卓越した才能を駆使した。」<sup>32)</sup>

31) Arbeiter-Zeitung, 8.Dezember 1929.

32) Leichter, O.: Glanz und Ende der Ersten Republik, Wien 1964, S.91f.

しかしながら社会民主党指導部およびダンネベルクも共にこの憲法改正交渉の成功を過大評価したと言える。

レーザーはその点を明白に指摘している。

「普段は非常に賢明な戦術家であるダンネベルクも、今後もあらゆる問題は今回の交渉と似たようなやり方で解決でき、緩和できると思いこんでしまった。」<sup>33)</sup>

憲法改正後、ダンネベルクは2度アメリカへ渡り、各地を旅行しているが、アメリカの新聞『ニューヨーク・タイムズ』も彼の訪米を取り上げるほど、彼の名前は海外でも知られるようになっていた。<sup>34)</sup>

新憲法は民主主義の崩壊を数年間は遅らせることが出来たが、阻止することは出来なかった。しかしこの憲法は第二次大戦終了後にオーストリアの第二共和国が成立した1945年、何ら変更されずに再び効力を発せられ、その不変の価値が改めて認められたのだった。

### 終焉に向かって

ショーバー首相の下でウィーン市の財政を脅かそうとする新たな計画が続いた。彼らはいわゆる「ダンネベルク分配基準」の変更を要求した。『労働者新聞』は書いている。

「問題とされているのはウィーン市から金を取り上げようとする以外に何物でもない。また人口で最大の、行政では最も模範的な州の経済的弱体化以外の何物でもない。それによってこの州と、赤いウィーンを支配している社会民主党の政治力に打撃を与えるためにである。」<sup>35)</sup>

ダンネベルクは、要求された4千8百万シリングの代わりに2千2百万シリングの損失をウィーン市にもたらす妥協案を政府に示した。最終的にはウィーン市は年間2千9百万シリングを支払わざるを得なかった。

1931年6月、クレジット・アンシュタルト銀行の破産によってオーストリアの経済危機は深刻化した。この未曾有の経済危機の中でなされたザイペルによる連立政権の申し出に対し、社会民主党は連立政権への参加を拒否した。<sup>36)</sup> 従来から他の政党との和解的な連合政策をとり続けていたレンナーも今回は連立を拒否した。ザイペルの連立の申し出は、労働者や使用人を

33) Leser, N.: Zwischen Reformismus und Bolschewismus. Wien 1969, S.447.

34) Kane. a.a.O., S.163.

35) Arbeiter-Zeitung, 19.Dezember 1930.

36) Leichter, a.a.O., S.129.

犠牲にして銀行の再建を図ろうとする彼の不人気な経済措置の共同責任を社会民主党に取らせる策謀だと見なされたからだった。ダンネベルクも、こうした状況下で政府に協力することはできない、という意見だった。しかし彼は約一ヶ月後の、ある党員の葬儀の際に、党議員団の決定にはザイペルに対する当然の不信の念だけでなく、党議員団の感情的で硬直した態度にその原因があることをほめかす発言をしている。<sup>37)</sup>

1932年4月24日のウィーン市議会選挙で社会民主党は勝利を得た。党は100議席中66議席を確保し、圧倒的な第一党となり、ウィーン市を支配することになった。しかしナチスも15名が当選し、キリスト教社会党の19議席に迫った。選挙の結果を受けた連邦首相ブレスュは退陣し、ドルフスが連邦首相の座に就いた。国会での議席は与党83議席（キリスト教社会党66、護国団8、および農村同盟9）野党は82議席（社会民主党72、大ドイツ党10）だった。

ダンネベルクは党指導部からウィーン市の財務担当を任されることになった。同時に規定により彼は市議会の議長職を辞さねばならなかった。財務担当となったダンネベルクは最初の予算案作成の段階で、福祉事業費を減額せず維持すること、また雇用促進のために住宅建設を行なう旨を述べた。<sup>38)</sup>

1933年3月4日、職務規定を巡る議論の過程で市議会議長のレンナーは辞任した。社会民主党に一票与えて多数派になるためにである。それまでは政府側が多数派だった。次の議長となったキリスト教社会党のラメークも同様に辞任し、大ドイツ党のシュトラフナーが3番目の議長になったが、二人の前任者の例に倣ってこれまた辞任した。こうした事態を連邦首相ドルフスは「議会の自己解散」だと主張し、自らの政治のために利用したのだった。こうした事態がどのような結果をもたらすことになるのか、憲法を誰よりも良く知っているダンネベルクのような経験ある人物が思いつかなかったとは、容易には理解できない。常に冷静で、理性的な対応をすることで知られていた彼がこうした事態を楽観視していたとは考えられない。想像されることは、ダンネベルクは連邦首相ドルフスとの直接交渉に期待をかけていたのかも知れない、ということである。

ドルフスはこの事態が生じる直前に、ダンネベルクとザイツを呼び寄せ、世界的なスキャンダルになる危険性のあった「ヒルテンベルク武器事件」で彼らの協力を求めていた。<sup>39)</sup> ライヒトナーによれば、ドルフスはさらに数日後に仲介者を通じてダンネベルクに交渉の余地があることを告げている。そしてドルフスが独裁への道を歩み始めた24時間後の3月8日にダンネベルクを呼び寄せ、「社会民主主義者が反ナチの方向に向かっていることは、悪い考えではない」

37) Kane, a.a.O., S.164f.

38) ebd., S.167.

39) ebd., S.168.

と述べ、「反ナチ」の方向で協力を求めたのだった。<sup>40)</sup> このドルフスの協力要請をまともに受け取ったダンネベルクを責めることは酷であろう。現実にオーストリアでもナチスの危険性は深刻だったからである。3 日前の 1933 年 3 月 5 日、ドイツのナチスは選挙で勝利を収め、それに呼応したオーストリアのナチスはあらゆる手段を用いて政府を攻撃しており、それに対抗するため、ドルフス政府は社会民主党の協力を必要としていたのである。

ダンネベルクがドルフスによって約束されていた交渉を待っている間に、政府はダンネベルクによって管理されていたウィーン市財政局に対する新たな攻撃を準備していた。3 月 15 日、政府により緊急令が発せられた。それは以前からウィーン市当局が行なっていた連邦税の徴収を国が行なう、というものだった。こうした事態の中で始まった 1933 年 4 月 15 日の臨時帝国会議でダンネベルクは党内保守派の「時期を待つ」戦術を擁護する演説を行なった。彼は交渉の政治を公然と支持し、優柔不断な人物という汚名を甘んじて引き受けたのだった。その最大の理由はオーストリア国民同士による争い、いわゆる「市民戦争」を回避したい、ということだったと考えられる。あるいはカーネが言うように「詳細には説明のつかない奇跡」によって、自分たちにとって有利な状況が生まれるのではないかと、との期待があったのかも知れない。<sup>41)</sup>

ウィーン市議会の最後の会議で問題となったのは、もはや社会主義の構築ではなく、そもそもウィーン市の財政的生き残りだった。ドルフス政府の出した緊急令はウィーン市が受け取っていた国の贅沢税からの割り当て金を廃止し、4 月 21 日には芝居の内容が文化的、教育的であれば、劇場は娯楽税の対象から外すとされ、その措置は全国の劇場にも適用された。7 月、ダンネベルクは議会で約六千万シリングの赤字を報告せざるをえなかった。ウィーン市の公務員の減俸措置でもおいつかなかったのである。<sup>42)</sup> 9 月には新たな二つの緊急令が出され、贅沢品や贅沢な飲料に対する課税も廃止された。結局ウィーン市は緊急令の発令以降、約 1 億シリングの税収入を失うことになった。<sup>43)</sup>

1934 年 2 月 9 日、ウィーン市議会は第一共和国最後となる会議を開いた。それは 28 分か続かなかった。ダンネベルクが手短かにウィーン市による 1927 年 7 月に採用されたドル借款の転換、および新たな借款を設定する可能性についてしゃべった後で、キリスト教社会党の市会議員クンシャクが発言した。彼は演説の中でウィーン市、及び民主主義のオーストリアに対する燃えるような信条告白を行ない、危機に直面した今、社会民主党員に協力を呼びかけた。<sup>44)</sup> クンシャクがそうした発言を 1933 年 3 月時点で行なっていたら、別の展開もあり得たのに、と考えたに違いないダンネベルクはこう答弁した。

---

40) Leichter, a.a.O., S.173f.

41) Kane, a.a.O., S.170.

42) Arbeiter-Zeitung, 25.Juli 1933.

43) Kane, a.a.O., S.172.

44) Arbeiter-Zeitung, 10.Februar 1934;

「事態は明らかに異常に深刻であり、もしかするとウィーンの住民の多数、ウィーン以外のオーストリア国民が思っている以上に深刻かもしれない（。。。）クンシャク氏がここで発言された思想的立場は、混沌から抜け出す道を探そうと努力している人たちが、どのような陣営にも存在することを物語っている。実際にそうした道が取られれば、ウィーン市のために望ましいことなのだが。」<sup>45)</sup>

1934年2月12日、リンツで社会民主党の共和国防衛同盟と警察との間で武力衝突が生じた。衝突はウィーンにも広がった。いわゆる「1934年2月蜂起」である。ウィーン市庁舎は警察に占拠され、執務室を去ることを拒んだ社会民主党の市長ザイツは警察の拘置所へ連行された。パウアーはチェコスロヴァキアへ亡命、レンナーおよびダンネベルクは自宅から警察へ連行された。<sup>46)</sup>

1934年7月、ある知人に宛てた手紙でダンネベルクはこう書いている。

「監獄の窓から見える小さな空に浮かんでいる太陽を毎月目で追っていると、全てのものが回っていることが分かります。必要なのは忍耐だけです。そうすればまた素晴らしい時代を体験することになるでしょう。」<sup>47)</sup>

1934年7月25日、ナチスの武装集団が首相官邸を襲い、ドルフスは殺害された。しかしながらこのナチスの蜂起は警察と軍隊に鎮圧され、さらに幾つかの州で起こったナチスの武装蜂起もすぐに鎮圧され、ナチスの政権奪取の計画は失敗した。ドルフスの後に連邦首相となったのはシュシュニクだった。

彼は敬虔なカトリック教徒で、キリスト教社会党に属し、ナチス・ドイツからオーストリアの独立を守り通そうとした。

1934年10月9日、ダンネベルクは釈放されたが、パスポートは渡してもらえなかった。また週に2回、警察に出頭せざるをえず、当局の許可なくウィーンを離れることも許されなかった。

ダンネベルクは1938年3月に再逮捕されるまで、非合法の活動を行なった。またこの間、外国旅行の申請を行ない、スイスで社会民主党の活動家に会い、ウィーンの社会民主主義者支援のための資金援助を頼んでいる。<sup>48)</sup>

---

45) ebd.

46) Kane, a.a.O., S.175.

47) ebd., S.177.

48) ebd., S.181.

首相シュシュニクはますます強くなるナチスの圧力にさらされていた。1938年3月9日、もはや極端な方法でしかオーストリアの独立を守る方法はないと考えたシュシュニクは決定的な措置を発表した。それは国民投票によってオーストリアの独立の賛否を問うものだった。国民投票は3月13日に予定された。シュシュニクはナチス・ドイツによるオーストリア併合問題を国民投票にかけ、圧力をかけるヒトラーに対抗しようと考えたのだった。背景にはエチオピアとスペインの問題で反目していたイギリス・イタリア間の会談が成功し、オーストリアに有利な情勢が生まれるかもしれない、との思惑もあった。この計画を知ったヒトラーは激怒し、ドイツ軍のオーストリア進攻を決意する。

ドイツ軍が進攻する数日前、ダンネベルクは熟慮の末、ナチスに反対するシュシュニク支援の意思表示を行なった。これがダンネベルクが果たした大きな政治的役割の最後だった。ダンネベルクは当時の状況下で、こう言った。

「例え党は、全てが失われたことが分かっているとしても、党は交渉による政治を支持し、譲歩を巡る闘いを破局へ至るまで継続すること以外には何も出来ない(。。)党はこれまでのように、あたかも希望がまだ存在するかのように、さらに政治的に行動しなければならない。」<sup>49)</sup>

3月11日、国民投票が中止され、ドイツ軍がオーストリア国境へ接近している、との情報が伝えられた夜、ダンネベルクは亡命を決意し、夜行列車でチェコへ向った。列車はすでに国境を越えていた。しかしチェコの国境警備隊はオーストリアの亡命者たちの入国を拒否し、列車は引き返さざるをえなかった。そしてウィーンの前ではすでに秘密国家警察がダンネベルクを待ち受けていた。彼は逮捕された。

3月12日、10万を超えるドイツ軍は何の抵抗も受けず、国境を越えてオーストリアへ侵入した。しかも多数のオーストリア人の熱狂的歓迎を受けたのだった。同時にオーストリア国内で社会民主党員や共産党員、ユダヤ人などが逮捕され、その数は約7万名に達した。

ヒトラーはドイツによるオーストリア「併合」の賛否を問う国民投票を4月10日に行なった。ウィーンでは逮捕を免れた著名な社会民主党員に「併合」に賛成の投票をする、と公言するよう求められた。とりわけオーストリア第一共和国の初代連邦首相も務めたレンナーは投票1週間前に日刊紙に「併合」に賛成票を投じる旨を公式に発表した。

「私は、同志たちに対して何の注文もありませんが、以下のように言明することができます。社会民主主義者として、従って諸民族の自決権の擁護者として、ドイツ系オーストリア共和国

---

49) ebd., S.182.



の初代の首相として、またサン・ジェルマンのオーストリア講和代表団の元団長として、私は『賛成』の投票をするでしょう、と。」<sup>50)</sup>

一説にはレンナーの公式発言はダンネベルク釈放の交換条件になった、と言われている。しかしながらダンネベルクは釈放されなかった。<sup>51)</sup>

1938年5月初旬、ダンネベルクはダッハウの強制収容所へ、9月にはブーヘンヴァルトの強制収容所へ送られた。この間、ダンネベルクの妻は夫の釈放に向けて奔走した。彼女は秘密国家警察に対しても何回も嘆願書を送り、夫はパウアーやドイッチュとは常に対立していたし、夫がウィーンに留まったのは、何らやましいところがなかったからである、と訴えた。<sup>52)</sup>しかし当然ながら何の効果もなかった。妻には、ユダヤ人の置かれている状況を理解することはできなかったのだった。ダンネベルクは逆にそうした妻の身を案じた。ユダヤ人である彼と結婚している妻には保険証もなく、病弱な妻がどうやって必要な薬を調達するのか気にかけていた。後に妻はダンネベルクの同意も得てイギリスへ渡り、戦争終結を迎えたが、アウシュヴィッツ絶滅収容所で亡くなった彼に再会することはなかった。

ダンネベルクは4年半にわたってダッハウとブーヘンヴァルトでの強制収容所の苦しみに耐えた。カウツキーは収容所から釈放された後にダンネベルクの妻に宛ててこう書いている。

「囚人たちを取り囲んでいるあらゆる困難や、彼らを虐げる卑劣さと断固として闘った多くの人を私は見てきました。しかながら恐らくはダンネベルクほど断固として闘った人物はいないでしょう。自由の身であった時の彼を際立たせていた熱心さや誠実さ、そして能力、それらを彼は収容所での生活や労働にも持ち込んだのでした（。。）私がダッハウにやってきたとき、囚人仲間は彼の並はずれた働きを行なった素晴らしいエネルギーのことを語っていました。」<sup>53)</sup>

ドイツ人で、社会民主党員でもある一人のカポ（強制収容所の囚人でもある看守）がダンネベルクの仕事を可能な範囲で軽減した、と伝えられている。過酷な1年間の強制労働の後、ダンネベルクの囚人仲間は1939年春に彼を靴下工場へ回すことに成功した。そこでダンネベルクは、カウツキーの報告によれば、間もなく「彼の誠実さ」のお陰で検査官という比較的楽な部署へ配属された。ブロックの最年長者である彼はパン、ソーセージ、チーズ、シロップなどの管理を任されたが、食事を巡る囚人同士の争いを防ぐため、その都度の受取者の氏名、日付

50) Hannak, Jacques: Karl Renner und seine Zeit. Versuch einer Biographie. 1965, S.652.

51) Kane, a.a.O., S.183.

52) ebd., S.184.

53) ebd., S.185.

をメモに取ることで公正さをはかった、と言う。<sup>54)</sup>

当初の 1 年半は平穏だった。しかし 1940 年 12 月、靴下工場で働いていたユダヤ人たちは二人の新しい収容所所長自らによって工場から、常に死の危険に晒された石切り場での過酷な労働へと追いやられた。カウツキーは書いている。

「彼が過ごしたのは、相変わらず過酷な一年だった。十分な食べ物をもらえなかっただけに、一層過酷だった (。。。) 私は彼のことを心配していたが、彼の不屈のエネルギーと生きる意欲によって彼は頑張り通した。」<sup>55)</sup>

1942 年夏、ダンネベルクの状況は多少良くなった。収容所の苦しみを分かち合ったある囚人仲間はダンネベルクの態度を印象深く描いている。

「ダッハウやブーヘンヴァルトでおよそ彼と一緒にいた者は、ダンネベルクがいつか再び光を見ることができるという、いかなる希望も抱いてはいなかったことを知っている。しかしながら彼の断固とした態度、沈着冷静な態度、品位は一瞬たりともこの見放された者から失われることはなかった。彼は地獄の中でも我々の最高の心の相談相手であることを止めなかったし、決して取り乱すこともなかった。乞食のような身なりで、背中に物乞いの袋を背負わされ、馬車に繋がれた馬のように、気分を滅入らせる最低の仕事をあてがわれても、彼は頭のとっぺんからつま先まで偉大な人物のままであった。」<sup>56)</sup>

1942 年秋、終焉が近づいた。1942 年 10 月の帝国保安本部の布告に基づき、帝国領域内の全ての強制収容所から「ユダヤ人」を追放し、ユダヤ人は全員アウシュヴィッツ絶滅収容所へ移送されることになった。同月、ダンネベルクを含む 400 名のユダヤ人囚人たちがアウシュヴィッツ絶滅収容所へ移送された。ダンネベルクはいつものように冷静で、落ち着いていた。尤も彼にはこの最後の移送が何を意味するかが分かっていた。

アウシュヴィッツに到着すると 90 名の囚人が即刻ガス室へ送られることになった。ダンネベルクを含む他の囚人たちは労働のためイーゲー・ファルベン合成ゴム工場へ送られた。6 週間後、ダンネベルクは 50 名を超える囚人たちのグループと共にアウシュヴィッツ絶滅収容所へ戻された。収容所へ帰還した翌日、ダンネベルクの姿は消えてしまった。1942 年 12 月 12 日頃のことだったと言われているが、彼がガス室送りになったのか、薬物を注射されて亡

---

54) ebd., S.186.

55) ebd., S.186f.

56) Arbeiter-Zeitung, 14.Dezember 1947.

くなったのかは不明である。57歳だった。

## おわりに

以上、オーストリアの社会民主党のために全生涯を捧げたと言えるダンネベルクの生涯を追ってきたが、改めて彼の粘り強い闘いと、その精神の強靱さに敬服の念を抱かざるをえない。

最後にダンネベルクの娘が父を偲んで書いた文を挙げておこう。ここにも自らの信念のために刑務所でも毅然とした態度を取っているダンネベルクが紹介されている。

「私が父を最後に見たのは、私が17歳半の時でした。私たちがチェコの国境を超えて逃亡しようとした列車がウィーンへ送り返され、私たちはウィーンの駅に戻りました（。。）

父は即刻逮捕されましたが、兄と私は帰宅を許されました。私たちが泣きながら抱擁したとき、父は〈お母さんのことを頼んだぞ。しっかりするんだよ〉と言いました。チェコからの電話をずっと待っていて、翌日旅立つ予定だった母は、私たちだけが自宅に戻ってきたとき、真っ青になりました。

母は父を監獄に見舞うことが許されました。しかしすぐに父はブーヘンヴァルトへ、それからダッハウへ、後にアウシュヴィッツへ送られました（。。）

私たちが1934年2月に逮捕後初めて父を刑務所に訪ねたときの様子を、今でも私は鮮明に覚えています。囚人服を着た父と会うのは恐ろしいことでした。〈どうして君たち女性たちは素敵な服を着てこなかったのだい？〉と父は尋ねました。〈だってローベルト、刑務所訪問には相応しくないわよ〉と母は答えました。〈自分の信念のために刑務所にいることは名誉なことなのだよ。お願いだから、次回は相応しい服装できておくれ〉と父は言いました。父は常に誇りを持っていて、不屈でした。父の政治的信念が父の宗教だったのです。

父は厳格でしたが、でも善良で愛情に満ちた人でした。」<sup>57)</sup>

---

57) Kane, a.a.O.,189f.

